

102) 柿泥棒

子供の頃秋になると、学校の帰りに友達とよく柿を盗みに行った。盗みに行くと言うより、道すがら農家の庭先から道路に突き出している柿木の枝に飛びついて、たわわに実った柿の実をもぎ取るのである。といってもそこは農家とて、悪ガキどもにそうそう大事な果実を盗まれてはたまらないから、手が届かないところに成るようにはしている。だからこちらも道具が必要になるのだが、その道具と言うのは雨傘だった。傘の柄の手掛けの曲がった部分を柿木の枝に引っかけて、枝を手繰り寄せて、実をもぎ取るのである。この日も井上君と傘の柄で柿の木を、存分に引っ張り込んだところまでは良かったのだが、次の瞬間突如として枝が真上に跳ね上がった。井上君もオイラも瞬間ナニが起こったのか分からなかったが、傘の一点に目を凝らすとその謎が解けた。傘の柄の取っ手の部分が抜けて、手元には取っ手のない傘だけが残ったのであります。空を見上げると、何故か雨傘の取っ手をつけた柿の枝が、青空に揺れている。取っ手を返してくれ〜と叫びたかったが、柿の実と取っ手の両方を、この際諦めなければならぬ。取っ手のない傘を持って、いや〜惨めな雨上がりの秋空でありました。